鹿児島県大島郡与論町朝戸方言における身体感覚を表すオノマトペ

町　博光

はじめに

1．調査対象地：与論島は、鹿児島県の奄美群島南端に位置する。南方２８kmに沖縄本島を望むことができる。周囲２１．９km、面積２０．８２km²。一島で一町を形成し、９小字からなる。人口７，２２９人（１９８９年）。

生業は砂糖きび栽培を主とした農業。漁業は自給程度。これに、大島紬の生産と観光業が加わる。

鹿児島・沖縄本島への船便・航空便とも整備されている。

2．調査年月日：１９９１年7月２７日

3．教示者：吉田義信　１９１６年生（７６歳）

吉田ケイ　１９２８年生（６４歳）

4．調査：筆者が、吉田氏宅で、面接でおこなった。

5．記述方法：『方言資料叢刊』第２巻の調査票の語の配列に従って、該当するものを適宜列挙し、説明を加えていく。

Ⅰ　全身の感覚

1－1　快不快

さっぱり　さっぱりにあたる言いかたはない。

○ Furo 2ittʃakuta: 2itʃariti.（風呂　はいったら　気もちよくて。）

「さっぱり」にあたるものとして、動詞 2itʃarijuN を使う。

1－2　寒　さ

がたがた　gatagata, gatta:gatta:

○ pi:sanu pi:sanu gatagata puru:ti.（寒くて　寒くて　ガタガタ　震えて。）

ぶるぶる、ぞくぞく、すうすう　これらに該当するものもない。ただし、以下のような動詞で、具体的に言い分けをしている。

○ kadʒi pitʃige:ra waburutʃi.（風邪　引いたのか　震えて。）waburutʃi は〈ふらふらしたような震え〉を言う。mi:buru:juN は、全身の〈ぞくっとしたような震え〉を言う。

○ Fuʃina:nu sangi muiti.（背中の（に）　鳥肌が　生えて。）

1－3　熱　さ

ぼかぼか　pu:pu:

○ sai nudakuta: pu:pu: ʃitʃikitʃi.（酒　飲んだら　プープー　してきて。）

かっか　pu:pu:

II　皮膚の感覚

ひりひり　ひりひりにあたる言いかたはない。

○ puʃina: pi:jatʃi na:dʒi.（背中　ひりひり痛くて　ならない。）このように、動詞 pi:jakjuN（ひりひり痛む）一語で表す。

べたべた　buttʃa:buttʃa:

○ ʔaʃi patʃi. puʃina:nu buttʃa:buttʃa:ʃi.（汗　流れて。背中がプチャープチャー　して。）

むずむず、もぞもぞ　これらにあたる言いかたは、形容詞 paʃiko:saN（はしかゆい）で表している。

○ paʃiko:sai. puʃiɾɾa:kati muʃinu pentʃi mukamuka ʃui.（はしかゆい。背中に　虫の　入って　ムカムカ　する。）mukamuka は、虫が動くさまの形容である。

かさかさ、がさがさ　この言いかたも、形容詞 padago:saN（肌かゆい）で表している。肌がざらざらしているような状態を kassa:kassa: で表す。

○ ʔi:kinu tattʃi. kassa:kassa: padago:sai.（ふけが　出て。カサカサして　肌かゆい。）

すべすべ、つるつる　これも、形容詞 na:bju:saN で表す。

○ ʔitʃariti. Furo ʔittʃakuta: na:bju:ku nati.（気もちよくて。風呂入ったら　すべすべに　なって。）

ずきずき、ずきんずきん　puttu:puttu:, tʃikku:tʃikku:

両語とも、できものが腫れてくる時の痛みをいう。オノマトペを使う以外にも、動詞 putumitʃi（ずきずきして）で言い表すことも可能である。

III　頭部の感覚

3－1　頭

がんがん　gaŋgaN, gaŋgaN

くらくら　動詞 jusamitʃi（熱で頭がくらくらする）を用いる。

ずきずき　dʒi:dʒi:

○ Furadʒi dʒi:mikiʃi dʒi:dʒi: ʃui.（頭　ずきずきして　ずきずき

する。〉「ずきずき」にあたる言いかたは dʒi:dʒi: であるが、動詞 dʒi:mikjuN（ずきずきする）一語で言い表されることも多い。

ずきんずきん　dʒīNdʒiN

3－2　耳

ちかちか　tʃīratʃira

動詞 tʃiramikjuN（ちらちらする）で表すことも多い。

しょぼしょぼ　これにあたる言いかたはない。

ごろごろ　kaʃakaʃa

○ mitʃimūnunu peNtʃi miNtamanu kaʃakaʃaʃi.〈ゴミの　入って　眼の　玉の　カシャカシャして。〉

3－3　耳

きーん、じーん、じくじく　これらにあたる言いかたはない。

「うるさい」には、miNtʃasai があたり、程度のはなはだしいものには miNkudʒirjuN（耳崩れる）を使う。「じくじく」にあたる言いかたには、miNkusarjuN（耳腐れる）が使われる。

3－4　鼻

むずむず、ぐじゅぐじゅ　これらにあたる言いかたもない。

つーん　「鼻につーんとくる」ことを、pana ʔittuŋgatʃi（鼻　射とばして）と言う。「つーん」にあたる言いかたはない。

3－5　口

ねちゃねちゃ　muttʃa:muttʃa:

○ panadaine:ʃi. pitaro:kuʃi. muttʃa:muttʃa: ʃui.〈鼻だれのようだ。汚い。ムッチャームッチャー　する。〉

もこもこ　甘いものや脂っこいものを食べた時の感覚を、nutturumitʃi という。

がちがち　gattʃi:gattʃi:

ちくちく　tʃikku:tʃikku:

○ pa: jādi. tʃikku:tʃikku: jādi na:dʒi.〈歯　痛んで。チックーチックー　痛んで　ならない。〉

ずきずき　kī:ki:

ひりひり、ぴりぴり　piri:piri:, pīripiri

○ kare: ko:ti kutʃinu piri:piri: ʃui.〈カレー　食べて　口の　ピリーピリー　する。〉 piripiri は大和口かもしれないとのこと。

3－6　喉

からから　動詞 nu:dui ho:ratʃi〈喉　乾いて〉で表す。

いがいが　動詞 nu:dui ʃippo:di〈喉　すぼまって〉で表す。

ぜえぜえ　動詞 nu:dui pusumiti（puʃimuti）〈喉　細めて〉で表す。

Ⅳ　胴体の感覚

4－1　肩

こりこり　こりこりにあたる言いかたはない。

○ hata pusagati.〈肩　ふさがって。〉のように動詞で表現する。

4－2　胸

どきどき　tatutatu

どきんどきん　tattu:tattu:

「胸がどきどきする」のを表す言いかたには、nigutʃi wuduti〈胸がおどって〉を使う。動悸を激しく打つばあい、tatutatu などの象徴詞を使うが、一般的には、動詞 tatumikjuN（どきどきする）で表現される。

○ ʔudurutʃi. nigutʃi tatumitʃi wuduti ja:.〈驚いた。胸　どきどきして　おどって　ねえ。〉

きゅっと　nigutʃi piʃigjuN〈胸ふさぐ〉で言い表す。

むかむか　むかむかにあたる言いかたはない。動詞 kimu ʔagumaʃaN（胸がむかむかする）を使う。若い人は、mukamuka ʃui.〈むかむかする〉を使う。

4－3　腹

ぐうぐう　gu:gu:

たぷたぷ　gakugaku

○ watanu gakugaku ʃuNtana midʒi nudi.〈腹の　ガクガク　するまで　水　飲んで。〉これも gakumitʃi（ガクガクする）の動詞一語で表される。

ばんばん　動詞 watagu: tʃimajuN〈腹の皮が　突っ張る〉で言い表す。

ぐるぐる　動詞 wata go:mikjuN〈腹がぐるぐるする〉で言い表す。

4－4　胃

しくしく、じくじく、きりきり　これらにあたる言いかたはない。

4－5　尻

むずむず、もぞもぞ　形容詞 maigo:saN〈尻かゆし〉を使う。

○ mai go:sanu. kimunu ʔitʃariradana.〈尻　かゆくて。肝の　良くなくて。〉尻がむずむずする。居心地が悪くて。

Ⅴ　手足の感覚

ぶるぶる　sara:sara:（ふるえようのひどいばあい）、sarasara（小刻みにふるえるばあい）、gassa:gassa:（大きくふるえるばあい）、gasagasa（普通の時）

がくがく　動詞 gakumjuN（がくがくする）を使う。

○ tʃiNʃi gakumitʃi.〈膝　がくがくして。〉

ぬるぬる　nuru:nuru:（共通語的）

○ ʔatadaʃiN japaratta:ma ʃu:ru munu miNdʒi. nuru:nuru: ʃu:ru munu.

〈思いがけず　やわらかい　もの　握って。ヌルーヌルー　する　もの。〉

Ⅵ　関節（骨）の感覚

ごきごき、ぐきぐき　これにあたる言いかたはない。

○ nibui sukuno:ti kubi tʃimati.〈眠り　そこねて。首　つまって。〉

このように、kubi tʃimati を使う。

ばきばき　pakki:pakki:

ぼきぼき　pokki:pokki:

○ duku ʔussuNna. Fuʃibuninu pokki:pokki: wurigisai.〈あまり　押すな。腰骨の　ポッキーポッキー　折れそうだ。〉

patta:patta:　たきぎを折る時に使う。

pattaipattai　叩き折る時に使う。

おわりに

与論島方言の象徴詞の世界は、決して豊かに栄えているものではない。

豊かでないからといって、その象徴詞で表される場面が欠落しているわけではない。本土方言が象徴詞で表すところを、与論島方言では、動詞や形容詞によって表現している。そのさい、tʃiramikjuN（チラチラする）gakumikjuN（ガクガクする）などのように、象徴詞の一部をとりこんだ形で、動詞を形成していることが注目される。象徴詞をとりこむことによって、気軽に動詞を作り出しているのである。

本土方言の象徴詞が、２音節くり返しの４音節となることが多いのに対して、与論島方言の象徴詞は３音節くり返し６音節のものが多い。語アクセントも、３音節めの長音部分にくることが多く、方言らしさを表出している。

現在では、とくに若い人の間では、与論島方言の象徴詞の世界に、本土方言の象徴詞をそのままの形で容易にとり入れて使うことができる。しかし、それらは、年輩の人にとって、まだ大和口（ヤマトゥグチ）の意識でしか受けとられていないようである。

［まち　ひろみつ　広島大学］